

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

活動九年目に思う

法華コモンズ仏教学林 学林長

布施 義高

法華コモンズ仏教学林は、平成二八年四月の開講以来、活動九年目を迎えております。お陰さまで、今日まで素晴らしい軌跡を描かせて頂くことができました。これも偏に、ご協力頂けました先生方、そして、皆さまのご理解ご協力の賜に他なりません。スタッフ一同、厚く感謝申し上げます。次第でございます。

本学林は、西山茂理事長が掲げられた「日蓮仏教の再歴史化」を大きな理念とし、教学委員諸先生のご高見に導かれながら、今日を迎えております。また、今日までの歩みを振り返ります時、尊く献身的なスタッフの尽力について記さない訳にはいきません。

私個人は凡庸な人間で誠に申し訳なく存しておりますが、スタッフ個々は、非常に能力が高く、且つ、斯界興隆のために立ち上げられたコモンズの貴重な意義を噛み締め、高い志をもって、活動を支えております。各自は、各教団の役職や寺院の住職、あるいは世業など、それぞれに本務があり、日常的な繁忙を極める中で、当学林スタッフ体制の重要性を認識し、活動に全力を尽くして下さっています。只々、コモンズの活動を軌道に乗せるといった大きな使命感に基づき、屋台骨を支えてこられたことに、心より感謝申し上げます。

今後も当学林は、日蓮聖人の真実をより掘り下げて探求したい、また、その為の最先端の関連分野の知見を吸収したい、という受講者皆さまの求道心に応えて参りたいと存じております。

中には、大学や大学院での学びを了え、その後も、自主的に様々な角度から勉学を継続していきたいという、向学心に根ざしたニーズもありましょう。あるいは、社会に向けて、「仏教とは何か」「私たちは何をどうすれば良いのか」という問いに、日蓮仏教の立場から答えていく必要があるのかと思います。

このような目線の先に、「再歴史化」がおのずと開けてくるものと信じております。

一方、人口減少社会の到来とその影響などが、昨今の日本社会全体に深刻な影を落としていることは周知の通りです。研究・教育の世界への波及も深刻さを増しています。私の学生時代には



く想像できなかつた状況が、眼の前にあります。

こうした中、コモンズに寄せられる期待は今後、益々大きくなるのではないかと感じております。

私個人は、コモンズの活動がより諸方面に認識され、充実した活動が本格化するまでのつなぎとして今の役をお引き受けしたに過ぎません。活動九年目を迎えますことから、当学林のより高い飛躍を期し、次世代の頼もしい担い手へバトンを渡すことが急務と考えております。

そして、今後、より安定した運営体制を確立するために、皆さまから一層のご理解とご協力を仰ぎたくお願い申し上げます。

当学林は、これからも、日蓮門下全体のコモンズ（共有地）として、多様なニーズに応える場を供し得るよう尽力して参る所存です。

どうか、皆さまには、コモンズへの益々のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



布施 義高 先生

講義報告 集中講座 全二回

『日蓮遺文解題集成』の解説

講師 山上 弘道 先生

報告 西山 明仁

【前期第一回 山上弘道先生】

四月二十七日、山上弘道氏による『日蓮遺文解題集成』の解説（一）の集中講座が行われた。

令和五年の十二月に上梓された山上弘道氏の著書『日蓮遺文解題集成』について、執筆したご本人みずから解説をしていただいた。同書は山上先生が三十年の年月をかけて研究した成果を一書にまとめたものである。内容は、題名にある通り日蓮遺文の一つ一つについて解題を施したもので、本編の箇所だけで1088ページもの分量があり、遺文目録や日蓮書状の花押集などの付録を加えると約1300ページにも及ぶ。著書というよりも辞典というべきまさに大著である。

第一回目となる本講座では、真蹟遺文を中心に、新出・新加の遺文、名称を変更した遺文、従来の系年を変更した遺文等について、それぞれ関連する先行研究を紹介しながら、膨大な資料を丁寧に書き説得力のある私見を提示された。講座は途中の休憩をはさみ四時間にわたって行われ、本の内容に比例す

るように大変内容の濃いものとなった。

また山上先生は同書の概要を示したレジュメを用意し、レジュメに沿って詳細な解説をしてくださった。講座終了後の質疑応答では、会場、オンラインを含め多数の方から熱心な質問が寄せられ、一つ一つの質問に丁寧に答えいただいた。

【前期第二回 山上弘道先生】

六月十五日、山上弘道先生による『日蓮遺文解題集成』の解説（二）の一日講座が行われた。

本年四月二十七日に行われた第一回講座では、日蓮聖人が書かれた真蹟遺文について、遺文の基本的な書誌情報を中心に詳細な説明をしていただいた。二回目となる本講座は、真偽未決遺文30編に加えて、山上先生が偽撰遺文であると認定した遺文145編について、それぞれ詳しく解説をしていただいた。まずは、真偽未決遺文・偽撰遺文を合わせて175編にも上ることに改めて驚いた次第である。本編の解説に先立ち山上先生は、「日蓮偽撰遺文学」の必要性を力説し、偽撰遺文が作成された背景や思想などについて研究することの重要性を説かれた。

山上先生は、日蓮偽撰遺文を分類分けして、『立正観抄』、『三世諸仏総勘文教相廢立』の各遺文を中心として成立したであろう偽撰遺文、円明日澄の周辺で作成されたであろう偽撰遺文、日興門流の周辺で成立したであろう偽撰遺文、についてそれぞれ諸資

料を紹介しながらご説明くださった。これらの詳細は『興風』所載の山上先生の玉稿に論じられているが、ご自身の口から直接ご教示いただける貴重な機会であり、聴講者は山上先生の説明にうなずきながら熱心に耳を傾けていた。

全二回にわたる講座のなかで山上先生は、『日蓮遺文解説集成』が日蓮遺文の真偽の問題、系年の問題を議論するたき台となれば」と述べていた。日蓮遺文の真撰・偽撰をめぐっては、現在でも激しい論戦が繰り広げられている。日蓮の真撰遺文が発見されれば真撰と認められて一件落着となるが、真撰遺文が発見されない以上、真撰説と偽撰説はどちらも仮説である。その場合、仮説⇩反証の繰り返しにより日蓮遺文の真偽論は深化していくのだろう。本書は、今後日蓮遺文を研究するうえで座右の書とすべき一書である。



山上 弘道 先生

講義報告

一日集中講座

「韓国仏教の諸相」

講師 佐藤 厚 先生

報告 武川 清明

令和六年五月十八日（土）佐藤厚先生の集中講座「韓国仏教の諸相」が、新宿・常園寺祖師堂ホールでの対面およびオンライン配信にて、午後一時半より四時間にもわたり開催されました。

最初に韓国の宗教状況の分布として、四人に一人がキリスト教でもっとも多く、その理由として、朝鮮戦争後の米国からの布教と、経済成長にともない地方から都市への移動によって伝統的なコミュニティから切り離された人々の心のケアをキリスト教が担ったことや、キリスト教が有力な社会集団になることで現実的な便宜など、所属することによる利益を得られるようになったことなどが信徒を増やした要因である、と説明していただきました。

また異端とされる教団もあり、統一教会や新天地イエス教など十六教団が二〇二一年に韓国のキリスト教主要教団から異端認定されているとのことですが、韓国においては宗教人が一般の人々に影響を与えており、雑誌のアンケートなどで「韓国を動かす宗教人」としてキリスト教や仏教の宗教者が名を連ねていることを解説していただき、日本よりも宗教者が社会・世間で受容されているとともに、それらの人たちの発言が韓国社会で一定の影響があること

がわかりました。

その後、韓国における仏教の歴史についての説明では、朝鮮半島に三国時代に伝来して華嚴・天台・禅などが隆盛したが、朝鮮時代には儒教の影響で抑圧され十一宗から二宗に統合されたこと、植民地時代に朝鮮総督府の仏教保護とともに日本の影響で僧侶の妻帯が増加したこと、独立後は妻帯僧追放のための浄化運動に関連して教団の分裂があったこと、などを挙げていただきました。

現代の韓国仏教は禅宗が中心で、曹溪宗と太古宗で韓国仏教全体の九割を占めること、太古宗は妻帯の問題で曹溪宗から分裂したことなどを解説していただきました。

現代における日本との違いについて、韓国ではお寺は「祈祷の場」であって、大学入試の合格を母親が祈祷したり、自己の悩みを祈祷・修行により克服するために行く場所として認識されており、しかしそれが現世利益を意味する「祈福信仰」だという批判もあることも紹介していただきました。

実際の具体例としては、三日間で一万拜を五体投地のような作法で行い、目に見えるものすべてに感謝の気持ちで自然に湧いてきて自信も生まれたという人の話や、『金剛經』の一万読を行い、途中で皮膚の異常や頭痛と耳鳴りなども出たが、やり終えたときにはすべて収まって体も軽くなり、家族とも安らぐようになってありがたい気持ちがたくさん起こった、という人についても紹介いただきました。

今回の講義ではレジュメだけでなく、ネットでの動画を視聴しながら説明いただくことにより、韓

国での宗教事情についてイメージしやすく講義していただきました。あらためて佐藤厚先生に感謝申し上げます。



佐藤 厚 先生

講義報告

法華仏教講座

【令和五年度 後期】

第四回 村上東俊先生 第五回 神田大輝先生

第六回 川崎弘志先生

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会での講義形式を踏襲し、月一回二時間の枠で開催されている。講師は斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制でお迎えしている。ここでは令和五年度後期第四回、第六回の講義について報告したい。

各回ともに常圓寺様祖師堂地階ホールを会場とし、Zoom実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面式で講義が執り行われた。また、いずれの回も土曜日午後四時三〇分の開催で、仏教思想研

究・日蓮教学研究の第一線で活躍する研究者をはじめ多くの聴講者が集い、時間を三〇分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。

なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

【後期第四回 村上東俊先生】

令和六年一月六日、村上東俊先生の「日蓮花押の解釈における諸問題―花押の母字と変化の理由を探る―」と題する講義が行われた。講師の村上先生は、法華宗（陣門流）学林教授、立正大学法華経文化研究所特別所員、日本印度学仏教学会評議員など、数々の役職をお勤めになられている気鋭の研究者である。はじめに、これまでの日蓮花押の母字（花押が何をもとに作られているか）に関する先行研究について、中世日蓮門下における花押相伝から、近年の最新研究における解釈に至るまで、膨大な資料の一点一点を緻密に精査して、各時代における日蓮花押解釈について丁寧で紹介された。

次に、日蓮聖人の前期花押について、日蓮聖人と同じ中世の僧侶であり、また日蓮聖人と同じく名前に「蓮」を持つ中尊寺初代別当蓮光の花押と対比し、その形状の共通点から両者の花押はともに名前の一部である「蓮」をもとに作られたであろう、と推察された。そして日蓮聖人の花押にみられる楕円形の箇所について、蓮の花びら―すなわち蓮弁―を模したものである、と美術的な観点からも私見を提示

された。

後半は日蓮聖人の後期花押について、『日蓮聖人真蹟集成』所収の日蓮遺文にみられる「蓮」字と、漫荼羅本尊の花押の形状の同調性の高さに着目し、後期花押も前期花押と同じく「蓮」をもとに作成したものである、と推察された。続けて、日蓮聖人の花押が前期から後期に変化した理由について、花押変化の前後における日蓮聖人の生涯を概観しながら、はらのけ（下痢）を含む複合的な理由であろう、と結論づけられた。加えて補助資料として、日蓮真蹟遺文にみられる「之繞」、並びに花押が変化する弘安元年における日蓮聖人の動向について、まことに詳細な資料をご用意くださった。資料を一目見れば、多くの時間と労力を割いて作成された資料であることが瞭然であった。

その日会場に詰め掛けた多くの聴講者は、日蓮聖人の花押解釈に関する最新の研究に、興味深く聞き入っていた。講義終了後は、聴講者から熱心な質問が寄せられ、村上先生は一つ一つの質問に丁寧に対応されていた。（西山明仁 記）



村上 東俊 先生

【後期第五回 神田大輝先生】

令和六年二月一七日、立正大学非常勤講師・日蓮教学研究所研究員の神田大輝先生（博士〈文学〉）を講師にお招きし、法華仏教講座第5回「広蔵院日辰の教学思想とその基盤」の講義が執り行われた。

神田先生は近時、大著『広蔵院日辰教学の研究』（山喜房仏書林）を上梓された斯界期待の研究者である。立正大学でも多くの専門科目を担当され、教子も多い。

広蔵院日辰（一五〇八―一五七六）は、日蓮宗教学史上、戦国時代を代表する学僧であり、日尊門流の教学大成者として著名である。

今回の講義では、天文期の研鑽活動、特に教義書の書写蒐集、及びそれをなした他門流との人的交流に注目され、またその取材から後年の著述へと繋がる問題意識の連続性を踏まえつつ、日辰の宗義探究から発揮までの軌跡を丁寧に辿られた。

日辰は、享禄三年（一五三〇）、二三歳に西山本門寺の日心より「造仏誦誦墮獄の法門」を伝授され、教学の拠るとしたが、天文六年（一五三七、三〇歳）にその改悔から、他門の教義書の書写蒐集や一切経の閲覧等の研鑽活動期に入る。神田先生は、先ずその様相を詳細に論じられた。

次いで、大黒喜道師が指摘された「畿内勝劣派グループ」（日郷門流・日隆門流・日尊門流・日真門流の本迹勝劣義を共有する持続的なグループ）の存在に着眼しながら、日辰の教学確立期における他門教義書（『十三問答抄』『物釈』『法華宗本門弘経抄』『法華論科註』等）の書写蒐集活動や、それに基づく教学研鑽の様相を細かに論じてくださった。

また、論中、「護持此経論」の論争の真の争点など、教学史上の様々な重要問題についても所見を提示さ

れ、大変貴重な二時間となった。

今回の配布レジュメはA4紙三三枚という膨大な分量であった。

日蓮門下の教学の歴史を考究する上で極めて重要な内容であり、コモンズで本講義を執り行わせて頂いた意義は甚大である。

講義終了後は、聴講者一同から大きな拍手が送られた。（布施義高 記）



神田 大輝 先生

【後期第六回 川崎弘志先生】

令和六年三月二十三日、川崎弘志先生による「佐渡始頭本尊の研究（二）―国柱会の佐渡始頭本尊の真偽論―」の講座が行われた。川崎先生は『法華仏教研究』誌を中心に、これまで多くの優れた論文を執筆されている。

昨年秋の第一回目の講座では、身延曾存の「佐渡始頭本尊」について、真偽論を中心に詳細な解説をしていただいた。第二回目となる本講座では、国柱会に伝来する佐渡始頭本尊の真偽について、第一回目と同様に詳細な解説をしていただいた。

国柱会の「佐渡始頭本尊」は同会の創設者である田中智学氏が、手ずから臨写した本尊である。しかし当本尊の原本の所在は不明であり、その伝来も

様々な人の手を伝い紆余曲折を経ているという。

川崎先生は、国柱会の「佐渡始頭本尊」が偽筆であることの理由として八点を挙げている。そのうちのひとつとして、当本尊が文永期の日付でありながら、弘安期の特徴を有している点を指摘する。すなわち、佐渡において文永期に書かれた本尊が、弘安期の特徴を有することはあり得ない、と述べている。

本尊は、信仰者の直接的信仰対象となる重要なものである。その真偽を論ずるとなれば、ときに感情的なやりとりになっても不思議ではない。特に偽筆だと言われた側の当事者にとっては看過できない問題となろう。そのようななかで行われた講座終了後の質疑応答では、国柱会の関連団体の方から質問があり、その場で聴講していた私は内心ハラハラとしていた。しかし、その心配は杞憂に終わる。質問者の方もその質問に答えられた川崎先生も、感情的になることは全くなく、終始冷静に議論を重ねていた。両氏のやりとりのなかに「門流や会派の中垣を超えて法華仏教（日蓮仏教）の共通の智を学ぶ」という法華コモンズの理念を見た思いがした。

（西山明仁 記）



川崎 弘志 先生

「仏教哲学再考②」

「『大乘起信論を手掛かりに』」

講師 末木 文美士 先生

報告 佐古 弘純

末木文美士先生による連続講座「仏教哲学再考②」『大乘起信論』を手掛かりにⅡ」が開催された。末木先生は、日本仏教研究の最前線で活躍されている、誰もが知る仏教学者である。本講座は、全十六回を予定しており、令和六年度前期講座は五回目からの開催となった。講義概要に記されている通り、東アジアの仏教に大きな影響を与えた『起信論』を手掛かりとし、最先端の研究成果を踏まえ、東アジア仏教思想について学ぶことを目的としている。

第五回目は、『起信論』の思想史とその思想系譜についての講義となった。はじめに『起信論』の体系として、「真如と生滅の認識論（真理の言語化）」としての中観思想的側面と、「迷いと悟りの発生学（実践的）」としての唯識思想的側面の二重性が見られることを示した。続いて、中国における『起信論』の学説史（七世紀末～八世紀初めの盛唐期から、近代に至るまで）と、日本における『起信論』系思想の受容史（空海・最澄・安然から、近世・近代に至るまで）の概略を解説された。さらに、『起信論』に至る思想系譜として、まず初期仏教の縁起論となる「十二縁起」をあげ、つぎに「中観派の言語哲学」

ではその認識論について述べ、「唯識派の迷いと悟りの理論」ではその発生学にふれられた。そして「中国における唯識と如来蔵」では、その二つを融合した地論派と撰論派の学説について説明して、第一回目の講義は終了となった。この講義では、『起信論』の思想史とその思想系譜を全体的に把握することができた。また、真理の妨げとなる「無明」について、それをどのような働きによって無くしていくのかが問題となっていることが伺えた。

第六回目は、華嚴と天台（四明知礼）の教学を結びつけた鳳潭説を原点として、『起信論』の位置付けを確認する内容となった。はじめに、鳳潭は文献学的な面が強いことに加え、法蔵の縁起説を正統とし、澄観と宗密の唯心論（一心）を根源に置くことを否定して、『起信論』を大乘終教に位置付けていることを説明した。しかし、「法蔵は確かに『華嚴五教章』では『起信論』を大乘終教に位置付けているが、後に著した『起信論義記』では如来蔵縁起宗（四宗判）としており、優れた教えとしている所もある。また、澄観から宗密に至る過程でも法蔵の五教十宗判を批判しているわけではない（宗密の著作による）」として、鳳潭説への疑問も指摘した。そして、資料の『関西大学東西学術研究所紀要』（三一巻）に掲載された『大乘起信論義記』（国訳および注）を読解していく、法蔵が「真心」を根本において『起信論』を解釈していることを示し、その理由として、法蔵の『華嚴五教章』で説く五教十宗判では玄奘の唯識説が含まれておらず、『起信論義記』では唯識説を新たに教

判に取り入れ、それに対抗する形で「真心」を根本に位置付けたと解説された。最後に、教判論から見ているために、資料の『華嚴五教章』の解説文を参考にして、小乗教・大乘始教・大乘終教・頓教・円教の関連を説明されて、講義終了となった。この講義では、法蔵が『華嚴五教章』で説いた五教十宗判では玄奘の唯識説の位置付けが明確ではなく、唯識説に対抗するために『起信論義記』で従来の『起信論』の理解（心真如と心生滅）を一步進めた如来蔵縁起説（如来蔵＝仏性）を提示し、そこに法蔵の『起信論』に対する再評価が見られることが明らかになった。

第七回目は、仏性の問題点と華嚴における『起信論』の位置付けを確認する内容となった。はじめに、東洋文化研究所研究会での意見メモを参考にし、「仏性」について説明された。先生は、『涅槃経』における「仏性」は、法身説を元として展開している。一方、般若系統では空の積極性を「真如」として発展していく」と指摘し、「悉有仏性説と玄奘系の五性格別説の対立が大きな議論となった。『起信論』の再発見も反玄奘派の動向と関係している」と解説された。次に、「真如」「如来蔵」については、松本史朗氏（『縁起と空―如来蔵思想批判』大蔵出版、一九八九）の基体説（基体に依り諸法（ダルマ）が在る）の関係を認めつつも、「仏性」については「違う見方ができるのではないか」と述べられた。そして、佐藤嘉文氏（『跳訳道元』ぶねうま舎、二〇一七）の見解に基づいて、自身が作図した「世界・世界の外部・

世界海」の多元世界（マルチバース）の関係（『死者と靈性の哲学』朝日新書、二〇二二）を解説して、「世界の外部に飛び出していく手がかりとして、外部世界における他者として「仏性」を捉えることもできるのではないか」と指摘された。また、法蔵の教判について、『華嚴経探玄記』（五教判）と『起信論義記』（四宗判）を比較し、『義記』では唯識法相宗を肯定しつつ如来藏縁起宗を高く位置付けているが、華嚴円教の立場は曖昧になっていると説明された。さらに、宗密が禅の三宗と教の三宗を立て、心を清浄なるものとして絶対化していることを確認して、講義終了となった。

第八回目は、天台における『起信論』を主題とした内容であった。はじめに、真如を「随縁」と「不變」の二つに分ける考え方は、日本天台で重要視されて、最澄は徳一との論争で「随縁真如」を積極的に使ったが、その考え方は『起信論』には見られず、法蔵の『起信論義記』で発展した考えであることを確認した。法蔵の特徴について、「本来阿頼耶識（心生滅）の展開の中で「本覚」「不覚」「始覚」の問題が取り上げられているが、法蔵は「真如」と無明の問題として捉えている」、「真如と無明を対極的に捉えて、「真如」に対しての「無明」の側で真如門と生滅門が流動化しており、迷いと悟りレベルの問題となっている」と説明された。さらに、智顛には「随縁」の語は見られるが、「不變」と一對としての真如論として使用しておらず、湛然が無情仏性の問題を取り上げる時には、「随縁・不變」の思想が見られる

ことを示された。次に、随縁真如論の暫定的なまとめとして、四つの解釈（①現象界に働きかける真如、②生滅界の奥なる真理としての真如、③生成界の根源としての真如、④生滅界の内に働く真如）を提示された。そして『起信論』は通別円に通ずるも、法蔵の解釈は別教であると主張する四明知礼の「別理随縁」について詳細に解説されて、講義終了となった。この講義では、「随縁真如」の解釈とその思想の発展について触れることができた。

後期も引き続き開催される予定です。新規聴講もまったく問題ありません。末木先生は、聴講者の質疑応答にも真摯に対応して下さいます。皆様の聴講申し込みをお待ちしております。なお、本講座はリモート開催となっており、講義動画も受講者に配信し、期間内であれば何度でも見ることが可能です。詳細につきましては、「法華コモンズ」ホームページからご確認ください。



末木 文美士 先生

講義報告

連続講座 全四回

「歴史から考える日本仏教」①

中世の臨終行儀

―『往生要集』から日蓮の時代へ―

講師 菊地 大樹 先生

報告 澁澤 光紀

【第一講】『往生要集』から往生伝へ】

すでに第一一回目となる菊地大樹先生の連続講座「歴史から考える日本仏教」だが、令和六年前期は「中世の臨終行儀―『往生要集』から日蓮の時代へ」をテーマに、その第一回目の『往生要集』から往生伝へ」が四月十七日にオンライン講座として開講された。

今回の講座では、ジャクリン・ストーン博士の『臨終正念―中世前期の仏教と臨終行儀』が菊地先生により訳されて参照テキストとして使われており、その詳細な記述を手掛かりとして、「臨終行儀」を考えていく講義となった。菊地先生は講義の開始にあたって、大局的な観点から自ら「なぜいま、臨終行儀なのか」を問い、①2000年代に入り自然災害の多発や科学の限界等によって「人間の制御できない・解決できない問題」が出てきたこと、また②宗教の定義がスピリチュアルなものにまで拡がって解決不能な「死」を通じて「生」を考える死生学が登場したことを挙げ、今日の「宗教史」において「臨終正念」とその儀礼をケア・宗教・歴史の各分野から連動して問い直す必要性を強調された。ストーン博士は日本仏教（特に天台・日蓮宗）を

専門とするプリンストン大学教授で、参照テキストとなる『臨終正念』では、日本の「臨終行儀」を十世紀から現代までを叙述しながら、インド・中国にも目を配りアジア全体の地域研究の問題としており、また、「死」を一点ではなく「死にゆく過程」という線（境界的状况）でとらえて説明している点など、画期的な内容となっていることを述べられた。

第一回の講義では、まず「日本の臨終行儀小史」として奈良時代からの歴史を辿り、仏教に死後を託しての儀礼が始まり、やがて浄土に生まれる願い（浄土願生）が高まることで、慶滋保胤の『日本往生極楽記』や源信の『往生要集』が書かれて、浄土願生を叶えるための念仏結社「二十五三昧会」がつくられ、「臨終行儀」が実践されていく経緯が述べられた。そして、浄土願生の実現という「宗教的理想の普及」が起り、「二十五三昧会」と「念仏結社」が拡がって、願生する浄土も極楽浄土（阿弥陀仏）のみならず、補陀落浄土（観音菩薩）、兜率天（弥勒菩薩）、靈山浄土（法華経）や大日遍満思想など、浄土の競い合いも起こったという。

そうした浄土願生の大流行をつくった慶滋保胤の『日本往生極楽記』以後の数々の「往生伝」は、念仏結社の枠をこえて「理想的で規範的な死のモデル」を提供した。しかしその反面として、「往生の難しさ」をも示していて、「往生の失敗」への恐れをも生み出したという。そして「宗教的な理想としての浄土往生は、死への恐怖を鎮めると共に、それに失敗したらという不安も引き起こすことで、死の瞬間に集約される「両義性」をもつ」と述べて、第一回講義は終了となった。

【第二講 規範的な死―臨終行儀の理想―】

今回は、ストーン博士の『臨終正念』では「第二章「離れるべき世界」の内容を参照して、『往生要集』の「厭離穢土、欣求浄土」という両者の関係を考察する。そして、臨終の儀礼化と理想化がどのように行われてきたのか、I「死の準備―浄化と分離―」、II「儀式の形式」、III「きざし」という三つの視座からその様相を見ていく。

始めのI「死の準備―浄化と分離」では、まず臨終時に要請される「正しい瞑想（正念）」とは死の瞬間における精神集中だが、それが「正しい瞑想」であるかどうか、外見からどう判断されるのが課題とされる。また、理想的で規範的な死の四つの要素として、①死の準備（別の空間に籠る）、②死の空間で採用されたしつらえ（環境づくり）、③理想的な死までに行われる儀礼作法、④往生を遂げたという証拠、が挙げられる。『往生伝』には、自分の死を予知する話も多くある。また死の準備として、身心を清める、俗世を離れ、茶だけか断食をする（苦行）、財産を処分する（執着を断つ）、女性を遠ざける（男性優位の禁欲）などあり、「警戒」して僧となることも、死後の冥福の保証とされる。また、臨終を迎える儀礼空間として、今のホスピス病棟のような外界と遮断された「無常院」が用意される。

II「儀礼の形式」としては、中心に本尊の仏像や来迎像や図を置き、五色の糸でつながる設定をして、仏具や願文を持って読経・念仏・唱題・陀羅尼などを唱える。また『法華経』提婆品の「破地獄文」（淨心信敬不生疑惑者 不墮地獄餓鬼畜生 生十方仏前）を衣服に書いたり部屋に祀ったりした場合もあった。

III「きざし」は往生の瑞相のことで、黄金の光、紫雲、音楽、良い香り等が記されている。また浄土教では、阿弥陀仏の来迎を意味していた。「夢や幻視」も往生を遂げた（遂げる）ことの重要な証拠で、遺族が見る夢も証明となる。また、身体（遺体）に現れる瑞相としては、肉体的な腐敗がないことや、入寂の日や臨終時に排泄がなく、遺体が良い香りを放つことも往生の証拠とされた。

以上のような準備の上で瑞相のある「理想的で規範的な死」を迎えるのだが、緻密に演出された儀礼のなかで、正念をもって霊的な力（弥陀来迎など）を得て往生する往生人は、六道輪廻から解脱した聖人となる。聖人は、理想的モデルであるとともに稀なる存在であり、自分がそうした困難を克服できるのかという不安も与える。そのため「最後の瞬間に正念を持つ」という理想には、抑圧的な側面があった」と述べられて、講義は終了した。

【第三講 正念に失敗する―不安と臨終―】

今回は、第二講の「臨終時に正念を持つ」という理想に、抑圧的な側面（失敗の不安）があった」という結論を受けて、「臨終正念」に失敗する障害リスクを詳しく見ていった。はじめに、『臨終正念』の第四章「兆しを解釈する」を参照しながら以下のことが確認された。①兆しは瑞相とは限らず、その往生の成否を解釈する必要がある生じていた。②臨終時はいく点でなく曖昧で境界的な過程であり、失敗のリスクも大きい。③失敗を打ち消す解釈が行われるのは、既に往生がその念仏集団の存続にかかわるほど「社会的現実」になっていたからで、また突然死や災害死などの「瑞相の確認」と「往生の認定」も行った。

④「臨終正念」という安心が整えられることで、逆にハードルが上がって達成できない不安を生み出し、次なる歴史的段階に移って行くことになった。

I「危険と障害」では、突然死の怖れや死期の予知が問題とされ、また断末魔の苦しみから意識喪失してしまふことや、愛着の危険性や、死後にも財産等に執着する事、そして魔の妨害があること等の他に、往生を宗教的な自死として行ふ際のリスクなども挙げられる。また、II「生存者（遺族）の反応」では、九条兼実の長男の良通が臨終正念もなく突然死したことで、死後に臨終出家の作法を行った。このことは、臨終時の思いが浄土再生を決めるという論理（臨終正念）から、遺族が故人のために死後に功德を送る（回向供養）という、葬儀の論理への転換となった。そのほかに師匠の往生が理想と齟齬した事例や、伝統的な作法を破る禅宗的な「臨終ヒロイズム」が起ったという。III「戦略的準備」では、臨終行儀のリハーサルや「只今臨終」の観想が行われたり、功德の数量信仰が起ったが、量的実践も広がる不安を納められなかったという。

まとめとして、①熟練の修行者でも失敗するという、希望（往生）のメッセージの限界が警告されていた。②不吉な死は社会的なマイナスなので、肯定的解釈を施しすぐに葬儀で隠して、往生として喧伝した。③臨終正念主義が生み出す不安として、世俗・超俗であらゆる社会階層の人々が臨終正念を目標にしたが、その行いは安心感をもたらさなかったと述べ、講義を終了した。

【第四講 臨終行儀書と日蓮・日蓮宗】

最終回となる第四講では、ストーン博士の『臨終

正念』の第六章「臨終に立ち会ふ者」を参照しながら、日蓮と日蓮宗にとっての臨終行儀を検討していた。「臨終に立ち会ふ者」とは、臨終の場に立ち会ふ専門家としての「善知識」のことで、こうした善知識は、死穢を厭わない遁世僧たちが主に勤めて、やがて臨終正念の主役は、死に逝く者から善知識に替わっていった。また浄土教を否定する日蓮も、社会的通念となっていた「臨終正念」は受け入れており、その後の日蓮宗も、浄土系の臨終行儀を参照しながら対応していったという。では、次に各章の内容について説明していこう。

まずI「日蓮・日蓮宗における臨終への基本的立場」では、伝統的法華信仰者は極楽浄土往生を求めたが、日蓮は靈山浄土への往生を打ち出して同信者の独自の浄土とし、靈山浄土では師弟も家族も再会できるとした。また、II「臨終行儀と念仏・題目」では、どの時点で逝っても仏の名を唱えながらの立派な往生となるので、臨終時には經典誦誦ではなく、念仏や題目が唱えられたという。しかし、臨終題目は日蓮以前に行われていて、『修善寺決』には題目の目的は「浄土往生」ではなく「解脱の完成」としてある。その『修善寺決』の終末期修行についての文からは、日蓮偽遺文『臨終一身三観』が偽作されている。また日蓮は念仏者の「臨終正念」について、①解脱できなかったのに、往生したという嘘をついている、②臨終往生で具体的に悪相を表わす、③錯乱と狂乱を分けて、念仏者の多くは臨終時に狂乱死している、と批判している。III「中世武士の臨終」では、十念を唱えての往生にならって、天文期に法華宗信者の武士が題目十唱で切腹した事例を挙げ、また日蓮が波木井氏長男に「当位即妙不改本位」の

教えて、殺生の悪人の罪業を捨てずに成仏できると説いた例を示した。IV「日蓮宗の臨終行儀書」では、伝心性院日遠『千代見草』を取り上げると共に、日遠が書いた臨終修行の詳細な指南書『一念三千等之事』を紹介した。

最後に、①歴史的に天台浄土教と臨終行儀は一体化しているが、天台教学で学んだ日蓮の法華至上主義における「臨終正念」を再定義する余地あり。②中世における日蓮法華宗はあまり臨終行儀に関心を示さず、中世末期にようやく独自の臨終行儀書が現れたのは、近世的な宗派としての日蓮宗を考える上で興味深い、とまとめて、四回の講義を終了した。

なお、この「中世の臨終行儀」撰関期から日蓮の時代へを踏まえて、来る令和六年八月三十一日（土）には一日集中講座として、大谷栄一先生と菊地大樹先生による「臨終行儀の今―変貌する死と儀礼」が開講される。四時間の集中講義で現代の臨終行儀を徹底解説。ぜひ受講申込ください。



菊地 大樹 先生

『法華経』『法華文句』講義

講師 菅野 博史 先生

報告 編集 部

通算七一回となる菅野博史先生の『法華経』『法華文句』講義が四月二二日（月）開催された。この四月より、菅野先生の教え子の中国人留学生の方々が受講席に加わり、先生は始めにレジュメの章立てを説明され、漢文を中国語で読むこともあると話された。

今回の【経文】は、譬喩品の最後の偈文に入り「譬如長者 有一大宅」から、「毒害火災 衆難非一」まで。【テキスト】『法華文句』は、六八四頁の巻第六上の始まり「第二に偈に一百六十五行有り」から、六九〇頁四行目の「即ち是れ貧人の希求念望なり」とまで。

『法華文句』は、その内容を【科目】で要約して、活用すると実に便利。全部で一六五行の偈文を二つに分けて、一〇〇行は「上の長行を頌す」、六五行は経を弘通する方法の説明となる。「上の長行」は譬喩の内容で五つに分けられて、「第一の長者譬を頌するを明かす」から始まり「火宅譬」「五百人譬」「火起譬」と続く。そして火起譬では、禽獣が焼かれることを「五鈍使の衆生」に譬えて、鬼神が焼かれることを「五利使の衆生」に譬えている。五鈍使は貪・瞋・痴・慢・疑、五利使は身見・辺見・邪見・見取見・戒取未で、合せて「衆生の十使」となる。今回は、科目で「貪使を譬うるを明かす」までを講義されて、終了した。

第二回講義は、五月二七日に開講し通算七二回と

なる。今回の始まりは、【経文】では譬喩品末尾の偈文「鬪諍髓撃し 嚙齚嗥吠す」からで、テキストも六九〇頁五行目の「鬪諍髓撃」から始まる。【科文】では、前回の五鈍使（貪・瞋・痴・慢・疑）の説明の最後となる「疑使を譬うるを明かす」になる。今回は、この「衆生の十使」のうちの五鈍使に続いて、五利使（邪見・戒取見・身見・見取見・辺見）を説明した。「使」とは煩惱の異名で、五鈍使は禽獣に譬えられ、五利使は鬼神に譬えられる。

偈文の内容は、廃屋のような長者の大宅の中で、悪獣や毒虫や鬼神等が入り乱れ食い合いが行われている悲惨な様子が描かれている。『法華文句』の解説では、そうした地獄のような描写の一つ一つに教義的譬えがあるとして、五利使の説明がされていく。例えば、経文の「また諸鬼あり、その身は長大に、裸形・黒く痩せて、常にその中に住せり」では、これを五利使の「身見」に当てて、「裸形」は「自分が自在であると思ひ、修行せず慚愧の念が無いこと」、悪によつて莊嚴するので「黒い」、功德という元手がないので「痩せて」と解釈する。その解釈はこじつけとも思えるが、しかしそこには、『法華経』という經典を「完全情報体」と見て、宇宙のすべての意味がそこから読み取れるとする、智顛・灌頂の大系的信念と情熱が感じられる。

今回は、経文ではこの大宅に火が起り、悪獣毒虫や食人鬼や鬼神たちが互いに残害して血を飲み肉を喰らう様が述べられるところまで、テキストでは六九八頁一行目の「相残害」の如きなり」までを講義されて、終了となった。

第三回で通算七三回目の講義は、六月二四日に開催された。始まりは、テキストでは前回の「相残害の如きなり」までの続きで「既に禅中に於いて諸見を起こせば」からになる。【経文】では、譬喩品末

尾の偈文で「共相（たがい）に残害して、血を飲み肉を喰らう」から。【科文】では、前回の「色界火起を譬う」の続きになる。

今回の講義では、悪獣や毒虫や鬼神等が入り乱れて食い合い殺し合いが行われている長者の大宅が火に包まれ、その火の中で無邪気に遊ぶ長者の子供たちを救うため、方便を使って羊車・鹿車・大牛車の玩具で誘い出し、無事に火宅を逃れた後には「大白牛車」を与えて、それに子供たちが歓喜し乗り遊ぶ様子までを取り上げ、その一語一語についての譬喩的意味を『法華文句』の解釈により詳しく説明された。

今学期より中国人留学生が四名ほど聴講されているため、菅野先生は時折中国語を交えながら講義される。そうした受講環境もあって今回、中国語と日本語の違いとして「地涌菩薩」というのは中国語では発音しにくく、「涌出菩薩」といった方が言いやすい、という普段は聞けない話も拝聴できた。後で「大藏経テキストデータベース」で調べると「涌出菩薩」という言葉も論書などでもかなり使われているのが分かった。

毎回、詳しく解説されたレジュメを使つての講義なので、初めての方も十分に理解できます。ぜひご受講のほどお願い致します。



菅野 博史 先生

法華コモンズ仏教学林 後期講座一覧

2024(令和6)年度 **後期講座** 開講:9月~2025年3月

《 対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します 》

●すでに終了した講義も、動画配信等で受講できますのでお申込み下さい●

●仏教哲学再考② **『大乘起信論』を手掛かりに** 全4回【オンライン講座】 講師:末木文美士

開催日:第1回 10月2日 / 第3回 12月4日

第2回 11月6日 / 第4回 1月8日

開講時間:水曜日 18時30分~20時30分 【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

●連続講座 **現代の法華菩薩道とは何か** 全4回 【対面&実況】

開催日:第1回 10月26日(土)

上行プロジェクト(平和(政治)活動部門)

講師:中野 毅

政教分離下での「立正安国」一創価学会・公明党と立正佼成会・WCRPの挑戦と課題

第2回 11月30日(土)

浄行プロジェクト(環境活動部門)

講師:原井 日鳳

今日、危機の時代に於ける仏教の思想試論—共生論より蘇生論へ—

第3回 12月21日(土)

安立行プロジェクト(福祉活動部門)

講師:弓削多一郎

救ライから総合福祉へ—信仰と福祉の寺・法音寺

第4回 2025年 2月22日(土)

無辺行プロジェクト(学術活動部門)

講師:山上 弘道

不軽菩薩の利益について

開講時間:土曜日 15時~17時半

【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

●連続講座 **『法華経』『法華文句』講義** 全6回【対面&実況】 講師:菅野 博史

開催日:第1回 10月21日 / 第2回 11月25日 / 第3回 12月16日

第4回 1月27日 / 第5回 2月17日 / 第6回 3月31日

開講時間:月曜日 18時30分~20時30分 【受講料】1期6回分12,000円、1回3,000円

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX:042-627-7227

mail:hokkecommons@gmail.com / ブログ:<https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 **法華コモンズ仏教学林 事務局**

賛助会員一覧（敬称略）

※令和六年度分として

個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	1口	間宮 啓壬
6口	松原 勝英	1口	鈴木 正厳
6口	中野 顕昭	1口	長谷川正浩
3口	村上 東俊	1口	互井 観章
3口	持田 貫信	1口	澁澤 光紀
2口	菅野 博史	1口	国府田義昭
1口	西山 茂	1口	成田 喜達
1口	菊地 大樹	1口	匿名 希望

法人会員 ※1口 五万円

2口	立行寺	2口	本妙寺
2口	東洋哲学研究所	2口	大久寺
2口	持法寺	1口	法妙寺
2口	本國寺	1口	天龍寺
2口	善龍寺	1口	善生寺

特別支援団体

本多日生記念財団 36万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

◎皆さまの「賛助」ご支援に篤く感謝申し上げます。

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。下記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口（1万円）
- 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

《お申込み年度の特典》として

- 1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたりの受講することができます。

- お申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまた11頁下にあるメールアドレス、フックス、ブログからお申し込み下さい。
- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、フックスまたメールアドレスを明記する。

● 直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 0015007634712

「講座映像版」販売のお知らせ

○ 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回

○ 池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○ 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

① 鎌倉時代を射程にいれて ② 《頭密問題》を考える

③ 日本宗教史の名著を読む ④ 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千元（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジュームPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジューム印刷物

◆ 詳細はブログ (<https://hokke-commons.jp>) 参照。

■ 【本化ネットワーク叢書】 頒価一冊二千元+送料

○ 叢書(2) 『九識説』とは何か』

○ 叢書(3) 『本門戒壇論の展開』

法華コモンズ通信 第十三号

○ 発行日 二〇二四（令和六）年八月一日

○ 編集発行 法華コモンズ仏教学林

○ 発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一・一九

【FAX】 042(627)7227